

琵琶湖の治水について

今本博健

06年3月29日に建設省・水資源開発公団(現在は国交省・水資源機構と改称)で長年にわたって琵琶湖を担当された永末博幸氏のお話を伺った。淀川水系流域委員会のワーキンググループ「水位操作」(リーダー:西野麻知子氏)での審議に役立てるためであり、委員4名が出席した。以下は、永末氏の話提供に触発されて、筆者が日頃から抱いている琵琶湖の治水への疑問と提言をまとめたものである。琵琶湖の治水を考えるうえで参考になれば幸いである。

同氏の説明で「明治29年9月の豪雨がいまあればなるであろう琵琶湖水位を勘案して湖岸堤の高さをBSL+2.6mとしたが、これは計画高水位BSL+1.4mに余裕高1.2mを加えたものに相当する」「越波を考慮して汀線より内側にずらして前浜を残したが、はからずもそれが環境保全に役立っている」というのは理解できたが、丹生ダムを建設すべきという主張には納得できなかった。

普通、計画高水位はそれに達するまでは氾濫等による被害が発生しない無害水位を意味し、それを実現するための努力目標が治水計画である。琵琶湖の場合、BSL+1.4mがそれに相当する。しかし現状では、BSL+0.5m程度で床下浸水が生じだし、BSL+0.9mを超えると浸水戸数が激増するという。そのような状況がいままで放置されてきたとは困ったことである。そしてさらに困ったことは計画高水位以下では被害を発生させないようにする努力がこれまで真剣にされず、いまもされていないことである(筆者にはそう見える)。ここでの計画高水位は単に計画規模の雨があれば達する水位を表しているに過ぎないのである。治水の目標を「いかなる大洪水に対しても壊滅的な被害を回避する」ことに転換しても、これまでの無配慮への免罪符にはならない。

もちろん河川管理者も手を拱いていたわけではない。それなりの努力はしている。瀬田川洗堰からの放流能力を増加することにはつねに務めてきた。最近になって主張しだした丹生ダムの治水効果もその一つである。しかしこの主張は胸を打たない。これまでの河川管理者の説明を振り返っても、04年5月の「淀川水系河川整備計画基礎案」の段階まで丹生ダムによる洪水時の琵琶湖の水位抑制効果については触れていなかったではないか。それを組み込んだのは、利水が全量撤退の見込みとなって、ダム計画の大幅な見直しを余儀なくされたのちの05年7月の「淀川水系5ダムについての方針」からではないか。つまり、ごく最近まで河川管理者ですら丹生ダムにより洪水時の琵琶湖水位を低下させることを期待していなかったのである。利水が全量撤退見込みという彼らの予期せぬ事態に遭遇し、苦肉の策として慌ててそれを取り上げたとしか言いようがない。当然、流域委員会は「丹生ダムによる洪水時の琵琶湖水位の抑制効果はきわめて限定的である」と痛烈に批判した。丹生ダムの水位抑制効果は琵琶湖水位にして約2cmである。現在の無害水位であるBSL+0.5mをBSL+0.52mにできるに過ぎない。計画高水位までの残り0.88mをどうす

るといのか。志が余りにも低い。

要するに、琵琶湖の治水計画について河川管理者は完結できる方策を模索することすらしていないのである。換言すれば、琵琶湖には治水計画など「ない」に等しい。

では、どうすればいいのか。

いつ完成するとも知れぬ多くの施策を描いて、思い出したかのようにぼつんぼつんとほんの少しの効果しかない施策を時たま手がけていくのも一つの選択肢ではあろう。しかしそれでは琵琶湖周辺の住民は納得すまい。「それが治水というものだ」というなら、それは詭弁だ。

唯一の解決策は、河川対応ばかりでなく、流域対応を併用することである。そして無害という目標を軽被害に変えることである。これ以外に完結できる治水計画はない。無害という果たせぬ夢を住民に抱かせると、万一の場合に被害の拡大につながる恐れもある。罪なことだ。

流域対応は、森林保水の確保・防災調節池での貯留などの「雨水流出の抑制」、土地利用の規制誘導・建物耐水化・道路のような連続構造物の2線堤的活用などの「氾濫原の管理」、情報伝達・警戒避難活動・水害保険(補償)などの「危機管理」から成る。

琵琶湖でいえば、重視すべきは氾濫原の管理と危機管理である。とくに低地の住宅の移転あるいは嵩上げは早急に実施すべきである。休耕田を琵琶湖周辺に集め、あぜ道を2線堤機能を持つように改良することも有効である。一種の「湖岸遊水地」である。これは環境保全にも好都合である。もちろん河川対応を充実させることも重要である。瀬田川洗堰の放流能力を増加させるとともに、琵琶湖周辺の浸水地域での排水能力を増加させる必要がある。

琵琶湖総合開発事業の事業の一環でもある丹生ダムは確かに高時川・姉川の治水・利水に有効である。限定的であるとはいえ、琵琶湖の長期的な水位低下を緩和する効果もある。しかし、ダムは水没を伴い、周辺のすばらしい環境が消失する。水質も悪化する。いまでも姉川河口から遡上した魚たちは、姉川ダムがある姉川を避けて高時川を上るというではないか。琵琶湖の環境に悪影響を及ぼすことも懸念される。姉川・高時川の治水にはダム以外の代替案がある。利水にも解決策はある。丹生ダムに対してはいくら慎重であっても慎重すぎるということはない。

琵琶湖の治水あるいは利水の問題の解決に苦勞された先人の努力は高く評価している。その努力が近畿地方の繁栄に大いに寄与したことは確かであり、賞賛に値するともいえる。しかし、いま最も重要なことは危機に瀕している琵琶湖の環境をいかにして改善するかである。高時川・姉川流域の住民もそのことを理解して琵琶湖の環境改善に協力してほしい。それが引いてはあなたがたの地域の未来につながるのだから。

環境を主軸として治水および利水さらには利用を満足させることが琵琶湖に関係するすべての人々の使命である。淀川水系流域委員会はその先頭に立たねばならない。また立ちたいと思う。

(06-3-30 記)